

ねむい

СПАТЬ ХОЧЕТСЯ

アントン・チェーホフ Anton Chekhov

青空文庫

夜ふけ。十三になる子守り娘のワーリカが、赤んぼの臥ねている揺りかごを揺すぶりながら、やっと聞こえるほどの声で、つぶやいている。――

ねんねんよう おころりよ、
唄をうたつてあげましょう。……

聖像の前に、みどり色の燈明がとまっている。部屋の隅から隅へかけて、細引が一本わたしてあつて、それにお襦む袢つや、大きな黒ズボンが吊るしてある。燈明から、みどり色の大きな光の輪が

天井に射し、お襦袢やズボンは、ほそ長い影を、ペチカ 暖炉や、揺りかごや、ワーリカに投げかけている。……燈明がまたたきはじめる
と、光の輪や影は活気づいて、風に吹かれているように動きだす。
むんむんする。キャベツ汁と、商売どうぐの靴革のにおい。

赤んぼは泣いている。さつきから泣きつづけで、もうとうに声
がかれ、精根つきているのだけれど、あい変らず泣いていて、い
つやまるのかわからない。ワーリカは、ねむくてたまらない。眼
がくつつきそうだし、頭は下へ下へと引っぱられて、首根つこが
ずきずきする。まぶたひとつ、唇ひとつ、うごかすこともできず、
まるで顔がかさかさひに乾あがって木になって、頭は留針ピンのあたま
みたい、縮まったような気がする。

「ねんねんよう、おころりよ」と、彼女はつぶやく、「お粥かゆをこ
さえてあげましょう。……」

暖炉ペチカのなかで、コオロギが鳴く。となりの部屋では、ドアごし
に、主人と従弟いとこのアファナーシイのいびきが、間まをおいてきこえ
る。……揺りかごは悲しげにきしり、当のワーリカはぶつぶつ
ぶやく——それがみんな一つに溶けあつて、夜ふけの寝んねこ唄
を奏でているのを、寢床に手足をのぼして聞いたら、さぞ楽しい
ことだろう。ところが今は、せつかくのその音楽も、いらだたし
く、くるしいだけだ。というのは、うとうと眠気をさそうくせに、
眠つたら百年目だからだ。まんいちワーリカが寝こんだら最後、
旦那だんなやおかみさんに、ぶたれるだろう。

燈明がまたたく。みどり色の光の輪と影が、また動きだして、ワリーカの半びらきの、じつとすわった眼へ這いこむと、はんぶん寝入った脳みそのなかで、もやもやした幻に組みあがる。見ると、くろ雲が、空で追っかけつこをしながら、赤んぼみたい泣いている。そこへ、さつと風が吹いて、雲が消えると、ワリーカには、いちめんぬかるみの、ひろい街道が見えだす。街道には、荷馬車の列がつづき、背負い袋をしよった人たちがよたよた歩いて、何やら物影が行ったり来たりしている。両側には、冷たい、すごい霧をとおして、森が見える。と急に、背負い袋と影をしよった人たちが、ぬかるみの地べたへ、ばたばた倒れる。——『どうしたの?』と、ワリーカがきく。——『寝るんだ、寝るんだ!』

と、みんなが答える。そしてみんな、ぐっすり寝入る。すやすや眠る。ところが電信の針金に、鴉からすやカササギがとまっていて、赤んぼみたいに啼なき立てては、みんなを起こそうと精を出す。

「ねんねんよう、おころりよ、唄をうたつてあげましょう……」
と、ワーリカはつぶやくと、今度は自分が、暗い、むんむんする百姓小屋のなかにいるのが見える。

床ゆかには、死んだ父親のエフォーム・ステパーノフが、ごろごろしている。その姿は見えないけれど、痛さのあまり床べたをころげまわって、うんうん唸うなっているのが聞こえる。彼の言いぐさによると、『脱腸がおっぱじまった』のだ。痛みがひどいので、ひとことも口がきけず、ただ息を吸いこんでは、唇で（原文には歯

とあるが、誤植のように思われる)

「ブ・ブ・ブ・ブ……」

と、太鼓たいこをたたくような音を出すだけだ。

母親のペラゲーヤは、地主の旦那のお屋敷へ、エフィームが危き篤とくだと、注進に駈かけて行つた。もうだいぶ前に出ていったのだから、そろそろ帰つて来ていい時分である。ワリーカはカマドの上に横になつて、まんじりともせず、父親の『ブ・ブ・ブ』に聴き耳をたてている。するとそこへ、誰かが百姓小屋へ、馬車乗りつける音がする。それは旦那のお屋敷から、ちようどお客に来ていた若い医者いしやを、差し向けてよこしたのだ。医者は小屋へはいつて来る。暗いので姿は見えないが、咳せきをしたり、戸をかたこと

いわせたりするのが聞こえる。

「あかりをつけて」と、医者がいう。

「ブ・ブ・ブ……」と、父親がこたえる。

ペラゲーヤは煖炉ペチカのほうへ飛んでいって、マッチ入れの鉢のか
けらを、さがしはじめる。無言のうちに一分がすぎる。医者はポ
ケットをごそごそやって、自分のマッチをつける。

「ただいま、旦那、ただいま」と、ペラゲーヤは言つて、小屋か
ら飛びだして行つたが、しばらくすると、蠟燭ろうそくの燃えさしを一
つ持って帰ってくる。

エフィームの頬は桃いろに赤らみ、眼はぎらぎらして、そのま
なざしは妙にするどく、さながらエフィームが、小屋のなかも医

者の肚はらも、見とおしているようだ。

「おいどうした？ 何をまた思いついたんだ？」と医者は、病人の上へかがみこみながら言う。――「おやおや！ これはもう長いことなのかい？」

「どうしたって？ なあに旦那、おつ死ちぬ時が来ましたんで。……とてももう、助かりっこは……」

「馬鹿を言うじゃない。……直してやるからな！」

「お宜よろしいように、どうぞ旦那、ありがたい仕しあ合せで。だが、わしらもわかっておりますが……死に神がむかえに来たものは、もうどうにもならないんで。」

医者は、ものの十五分ほど、エフィームに精だしていたが、や

がて立ちあがって、こう言う。――

「ぼくには、もう何もできん。……ひとつ病院へ行くんだな。行けば、手術をしてくれる。今すぐ出かけるんだ。……どうしても行くんだぞ！　ちよいとおそいから、病院じゃみんな寝てるだろうが、大丈夫だ、手紙を持たせてやるからな。わかったかい？」

「でも旦那、いったい何に乗って行ったらいいか？」と、ペラゲーヤが言う。――「わしどもには、馬車がありませんで。」

「なあに、ぼくがお屋敷で頼んでやる。馬車ぐらい出してくれるさ。」

医者が出てゆき、蠟燭が消えて、またもや『ブ・ブ・ブ……』が聞こえる。半時間ほどすると、小屋へ誰かが乗りつける。それ

はお屋敷から、病院へ行く荷馬車を廻まわしてよこしたのだ。エフィームは身支度をして、出かけてゆく。……

さてこんどは、からりと晴れた、いい朝になる。ペラゲーヤは留守だ。病院へ、エフィームの容態をききに行つたのである。どこかで赤んぼが泣き、ワーリカの耳には、誰かしら自分の声で、うたっているのが聞こえる。――

「ねんねんよう、おころりよ。唄をうたつてあげましょう。……」
ペラゲーヤが帰ってくる。十字をきつて、ひそひそ声で、――
「病院じゃ、ゆうべのうちに元へ納めてくれたけど、朝がた、魂を神さまにお返し申したとよ。……天国にやすらわんことを、とわの安らぎを。……手おくれだったんだとき……もつと早かつた

らな、つてさ。……」

ワリーリカは森へ行つて、そこで泣いている。と不意に、だれかが首のうしろを、力まかせに殴りつけたので彼女はおでこを、白ら樺かばの幹へぶつけてしまう。眼をあげてみると、主人の靴屋が、立ちはだかっている。

「きさま、何してやがる、下司げすめが？」と言う。——「子供を泣かしといて、自分は寝てるのか？」

主人は、ぐいぐい彼女の耳を引っぱる。すると彼女は、頭を振りたてて、揺りかごをゆすぶり、れいの唄をつぶやく。みどり色の光の輪と、ズボンやお襠む褌つの影が、ゆらゆら揺れて、彼女にくばせするうちに、またもや彼女の脳みそを占領してしまう。ま

たしても、いちめんぬかるみの、街道が見える。背負い袋をしよつた人たちと、その曳ひく影が、ごろりごろりと横になって、ぐつすり眠りこむ。それを見ていると、ワーリカはたまらなく眠くなる。横になれたら、さぞいいだろうに、母親のペラゲヤが、ならんで歩きながら、彼女を急せきたてる。ふたりは奉公口をみつけない、町へいそぐのだ。

「お慈悲でございます、キリストのため！」と、通りすがりの人びとに、母親が物乞いする。——「恵んでやってくださいまし、お情けぶかい旦那がた！」

「その子をおよこし！」と、誰やら聞きおぼえのある声が、それに答える。——「その子をおよこしたら！」また同じ声がする。

こんどはつけつけと、トゲのある調子だ。——「寝てるのかい、このやくぎ！」

ワーリカはとびあがって、あたりを見まわし、ことの次第をのみこむ。街道もない、ペラゲーヤもいず、通行人もいず、部屋のまん中には、おかみが赤んぼに乳を吞ませのに来て、立っているだけだ。ふとつた、肩幅のひろいおかみが、赤んぼに乳をふくませ、あやしているあいだ、ワーリカは立ったまま彼女をながめ、すむのを待っている。窓のそとでは、そろそろ空気が蒼あおみかけて、影も、みどり色の光の輪も、目にみえて薄くなる。まもなく朝だ。「ほれ、渡すよ！」と、胸衣むなぎのボタンをかけながら、おかみが言う。——「まだ泣いている。誰かに睨にらまれて、虫が起きたんだろ

うよ。」

ワーリカは赤んぼを受けとり、揺りかごへ入れて、また揺すぶりはじめる。みどり色の光の輪も物影も、だんだん消えていって、もはや彼女の頭へ這いこんだり、脳みそを曇らせたりするものはない。が、あいかかわらず眠い、おそろしく眠たい！ ワーリカは頭を揺りかごのふちにもたせ、なんとか眠気に勝とうとして、胴なか全体で揺すぶるけれど、眼はやっぱり自然にくつついて、頭が重たい。

「ワーリカ、^{ペチカ}暖炉を^た焚くんだ！」と、ドアごしに、主人の声がひびく。

すると、もう起きだして、仕事にかかる時刻なのだ。ワーリカ

は揺りかごを離れて、物置へ薪をとり、駈けだす。嬉しい。駈けたり歩いたりしていると、坐っている時ほど眠たくないのだ。彼女は薪をかかえて来て、かまどを焚きつけ、木のように硬こわばった自分の顔がだんだん直つて、あたまがはつきりしてくるのを感じる。

「ワーリカ、サモワールをお立て！」と、かみさんがどなる。

ワーリカは木こつぱを割る。が、それに火をつけて、サモワールの下へ押ししてみかけたかと思うと、つぎの言いつけが聞こえてくる。――

「ワーリカ、旦那のゴム長をきれいにおし！」

彼女は床へ坐りこんで、ゴム長の掃除をしながら、このでつか

い深い靴のなかへ首をつつこんで、ちよいとうとうとしたら、さぞよかろうと思う。……と不意に、ゴム長が伸びだし、ふくれだし、部屋いっぱいに満ちひろがる。ワリーリカはブラツシをとり落とすが、すぐさま頭を振り、眼をむきだして、そのへんのものが目蓋まぶたのなかで、伸びたり動いたりしないように、懸命にじつと見つめる。

「ワリーリカ、表の段々を洗つとけ。お得意さんに恥をかくからな！」

ワリーリカは段々を洗い、部屋部屋の掃除をし、もう一つべつのペチカ暖炉を焚きつけ、それから店のほうへ駈けてゆく。仕事が多いので、一分間のひまもない。

が、辛いつらといったら、台所の台の前にじつと立ちづめで、ジャガイモの皮をむくほど辛いことはない。頭がしぜん台のほうへ垂れさがって、ジャガイモが眼のなかでちらつき、ほうちよう庖丁が手からずり落ちる。が、そばには太ったかんしゃく癩癩もちのかみさんが、腕まくりで歩きまわって、耳ががんがんするような大声で、しゃべり立てている。苦しいといえば、食事の給仕をするのも、洗濯も、縫いものも、同じことだ。ときには、何もかもほっぽりだして、床にごろりとして眠りたくなることもある。

一日が過ぎる。窓が暗くなってくるのを眺めながら、ワーリカは、木のようになったコメカミを両手でしめつけて、にっこりする。何がうれしいのか、自分でもわからない。夕やみが、彼女の

くつつきそうな眼をやさしく撫なでて、もうじきぐつつすり眠れるぞと、約束してくれる。

晩になると、旦那夫婦のところへ、お客がくる。

「ワリーカ、サモワールをお立て！」と、おかみがどなる。

この家のサモワールは小さいので、お客さんたちが飲みあきるまでに、五へんも立て直さなければならぬ。お茶がすむと、ワリーカはまる一時間も一つ所にじっと立ったまま、お客さんの顔をじろじろ見ながら、言いつけを待っている。

「ワリーカ、ひとつぱしり、ビールを三本買ってこい！」

彼女は、ぱつとその場をはなれると、眠気を払いのけたい一心で、なるべく早く走ろうとする。

「ワーリカ、ヴオトカを買つといで！　ワーリカ、栓抜きはどこだい？　ワーリカ、ニシンをお洗い！」

が、やつと、お客さんが帰つてしまふ。そここの火が消えて、主人夫婦は寢床につく。

「ワーリカ、赤んぼを揺すつておやり！」と、最後の言いつけがひびく。

暖炉ペチカのなかで、コオロギが鳴く。天井のみどり色の光の輪と、ズボンやお襠むつ褌から落ちる影が、またもやワーリカの半びらきの眼へ這いこんで、目くばせしながら、彼女の頭をもやつかせる。

「ねんねんよう、おころりよ」と、彼女はつぶやく、——「唄をうたつてあげましょう。……」

が、赤んぼは泣いている。精根からして泣きつづける。ワール力にはまたもや、ぬかるみの街道や、背負い袋をしよつた人たちや、ペラゲーヤや、父親のエフイームが見える。何もかも彼女にはわかるし、だれの顔も見わけがつくけれど、ただなかば夢見ごこちのせいか、どうしても呑みこめないのは、自分の手足を鎖くさりでしばつて、ぐいぐいお圧しつけ、生きる邪魔をしている或る力の正体だ。彼女はあたりを見まわして、その力からのがれようと、相手のすがたを捜すけれど、どうも見つからない。とうとう仕舞いに、へとへとになった彼女は、あらんかぎりの氣力をしぼり、かつと眼を見すえて、ちらちらしているみどり色の輪をふり仰ぎ、泣きたてる声に耳を澄ますと、やつとのこと、生きる邪魔をし

ている当の敵をみつける。

その敵は——赤んぼなのだ。

彼女は笑いだす。あきれたものだ、——こんな些細なことが、
なぜもつと早くわからなかつたんだろう？ みどり色の光の輪も、
もの影も、いやコオロギまでが、けらけら笑って、呆れているみ
たいだ。

ありもしない想念が、ワーリ力を支配する。彼女は円椅子から
立ちあがって、顔いっぱい笑みくずれながら、またたきもせず、
部屋のなかを行きつもどりつする。もうすぐ、自分の手足を鎖で
しばっている赤んぼから逃れられるのだと思うと、嬉しくつてぞ
くぞくする。……赤んぼを殺して、それから眠るんだ、眠るんだ、

眠るんだ。……

笑いだしながら、目くばせしながら、みどり色の光の輪を指で
おどしながら、ワーリカは揺りかごへ忍び寄って、赤んぼの上へ
かがみこむ。赤んぼを絞めころすと、彼女はいきなり床へねころ
がって、さあこれで寝られると、嬉しさのあまり笑いだし、一分
後にはもう、死人のようにぐっすり寝ている。

(С п а т ь х о ч е т с я, 1888)

青空文庫情報

底本：「カシタンカ・ねむい 他七篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年5月16日第1刷発行

2008（平成20）年6月25日第2刷発行

底本の親本：「チエーホフ全集 第七卷」中央公論社

1960（昭和35）年発行

入力：米田

校正：noriko saito

2010年7月6日作成

2012年2月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ねむい

СПАТЬ ХОЧЕТСЯ

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 アントン・チェーホフ Anton Chekhov
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>